



👁️👁️ みどころ

「メビウスの輪」とは？「エディプスコンプレックス」とは？それを勉強しつつ、家族とは？欲望とは？人間とは？そして性器とは？をテーマとした、前代未聞の「セリフなし」で語られる、キム・ギドク監督最大の問題作の展開をじっくりと！

さらに、男性器の移植は物理的には可能だろうが、その場合の性的機能の移植は？キム・ギドク監督が日本の映倫に相当する韓国の映等委と3度も争って、やっと韓国の劇場での公開にこぎつけた、本作の問題シーンもじっくりと！

私ですらわからない女性心理や男性心理、そしてまた、自傷行為による性的絶頂等々……。本作はきっとあなたの心の奥深くに潜む最も人間的な本質に迫ってくるから、よくよく心してご鑑賞を！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「メビウス」とは？「メビウスの輪」とは？ ■□■

『メビウス』というタイトルを聞いて「メビウスの輪」「メビウスの帯」を想像できる人はかなりのモノ知り。そして、「メビウス」が映画のタイトルとして使われていることによって、その映画のテーマが「メビウスの輪」「メビウスの帯」＝「無限のくり返し」と想像できる人はかなりの感性の持ち主。さらに、『メビウス』が韓国の鬼才キム・ギドクの第19作目の監督作品のタイトルだと聞いて、家族とは？欲望とは？人間とは？の連鎖をテーマにした映画だと想像できれば、あなたはよほどの映画通だ。

しかし、そんなあなたでも、「メビウスの輪」の中に性器とは何か？というテーマが入り、

ストーリーの軸として男性器の切断というショッキングなお話が入るとなると、こりゃ韓国版の「安部定」・・・？しかし、本来の「安部定事件」は情痴のもつれから生まれた猟奇事件だったし、それを素材として、小説としても映画、テレビドラマとしても大ヒットした渡辺淳一の『失樂園』は、妻子ある夫と夫ある人妻との一大不倫ドラマだった。したがって、両者とも「メビウスの輪」とは無関係！

■□■すごいテーマに！家族とは？欲望とは？性器とは？■□■

私はキム・ギドク作品は必見！と考えているキム・ギドクの大ファンだが、その最大の理由はテーマ設定のすごさにある。『受取人不明 (Address Unknown)』(01年) (『シネマルーム8』77頁参照) でも『サマリア』(04年) (『シネマルーム7』396頁参照) でも、とにかくテーマ設定がすごかった。しかし、本作のテーマのすごさはそれ以上で、多分キム・ギドク監督作品最高のすごさだろう。

キム・ギドクと同じようなテーマ設定のすごさで私が注目しているのは、デンマークのラース・フォン・トリアー監督。『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00年)、『ドッグヴィル』(03年) (『シネマルーム4』135頁参照)、『アンチクライスト』(09年) (『シネマルーム26』83頁参照)、『メランコリア』(11年) (『シネマルーム28』169頁参照) を観て、その独特の世界観、人間観に圧倒されたものだ。もっとも、彼の13作目たる『ニンフォマニアック Vol. 1 / Vol. 2』(13年) はすごいテーマだったが、私の評価ではその出来はイマイチ (『シネマルーム33』91頁参照)。しかし、キム・ギドク監督19作目となる本作のテーマはすごい。

キム・ギドク監督は映画作家である前に脚本家だから、構想力や文章力がすごいのは当然だが、本作のパンフレットには本作のテーマが短く要約されている。私はその文章の素晴らしさに感心したので、あえて下記にそれを掲げておく。

記

家族とは何か。欲望とは何か。性器とは何か。
家族、欲望、性器は全て一つのものから始まっている。
私は父であり、母は私であり、そして母は父である。
元々私たちは欲望から生まれ、欲望を再生するのだ。
私たちはまるでメビウスの輪のように一つにつながれている。
だからこそ羨み、忌み嫌い、そして愛するのである。

■□■浮気がバシると、ここまで？切断の被害者は？■□■

キム・ギドク監督はこれまでにたくさんの賞を受賞しているが、低予算、短期間で出演

者をギリギリまで絞るのがキム・ギドク流だ。今ドキ、かつての「黒澤天皇」と称された黒澤明監督のような完璧主義で映画を撮られたのでは、予算がいくらあってもたまらない。したがって、本作でもテーマは壮大だが、登場人物は父（チョ・ジェヒョン）、息子（ソ・ヨンジュ）、母



メビウス 新宿シネマカリテほか全国順次公開中！
© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.
配給：武蔵野エンタテインメント

（イ・ウヌ）と父の不倫相手（イ・ウヌの1人2役）のみ。

映画冒頭、階段に座って赤ワインを飲む妻の姿が映し出される。続いて、一人トーストの朝食を食べている息子と、こちらも一人でトーストの朝食を食べている父（夫）が映し出されるから、これを見ただけで、この家族がバラバラの状態になっていることがよくわかる。朝っぱらからヤケ酒のように赤ワインを飲み干している妻はかなり機嫌が悪そうだが、その原因が夫の浮気（不倫）にあることは、夫のケータイが鳴ったことによって明らかになる。こんな風景は、どこの家族でも日常茶飯事にあること（？）だが、そこから始まる、ケータイを取り上げようとする妻とそれを阻止すべく妻を殴り倒す夫の喧嘩のすさまじさはキム・ギドク監督特有のものだ。張り倒された妻がパンチラではなく、めくれあがったスカートから真っ白いパンティをモロに見せるのもすべてキム・ギドク監督流の演出・・・？ここまで激しい喧嘩（どつきあい？）をやった日の夜になれば、憎しみのあまり夫の性器を切り取ってやろうという狂気に駆られた妻の気持ちも、なるほど なるほど・・・？

玄関に置いてある飾り物の下に鋭利なナイフを隠しているのは泥棒対策のためだが、これほど夫婦仲が陰悪になれば、このナイフがひょっとして・・・？その「ひょっとして」が、夫の寝室に入り込んで、妻による夫の男性器切り取り行為だから、ビックリ！夫は一瞬その気配を察して飛び起きたから事なきを得たが、すると妻は次にはその矛先をなんと息子に・・・。エエッ、これってナニ？そう思っていると、息子の口から大きな悲鳴が・・・。

■□■サイレントからトーキーへ！それが映画の進歩だが■□■

私はいつも映画鑑賞前に、ネットを中心にその映画の情報を集めている。そのため、本作はセリフなしで「家族とは？欲望とは？性器とは？」をめぐる、「メビウスの輪」が「語られる」映画だと知ってビックリ！

私が「映画検定 公式テキストブック」（キネマ旬報映画総合研究所編）で映画検定3級

の試験勉強をしたところによると、映画の誕生はリュミエール一家が1895年2月に完成させたシネマトグラフであり、はじめて有料上映したのは同年12月にパリで行われた『列車の到着』などだった(同書62頁参照)。その後、映画はストーリーのあるものとなって大発展し、①アメリカ映画の父グリフィスや1920年代のアメリカ映画を風靡したセシル・B・デミル等の監督を経て、また、②セルゲイ・エイゼンシュテイン監督の『戦艦ポチョムキン』(25年)やアベル・ガンズ監督の『ナポレオン』(27年)等の無声映画の傑作を経て、1927年にはじめてトーキー映画『ジャズ・シンガー』によって、映画にサウンドがつくことになった(同書62～72頁参照)。

無声(サイレント)映画にこだわっていたチャールズ・チャップリンも、『独裁者』(40年)ではついに完全なトーキー映画を撮ることに。その後の映画の発展は著しく、近時は3D映画も多いが、そんな今、キム・ギドク監督はなぜセリフなしの映画に挑戦?

■□■セリフなしの挑戦に拍手!その功罪は?■□■

もっとも、本作はセリフなしとは言っても録音技術がないわけではないから、周りの音は入っているし、人間の声もうめき声や喘ぎ声はタップリと入っている。したがって、古臭いモノクロのサイレント映画でありながら、第84回アカデミー賞の作品賞、監督賞等5部門を受賞した『アーティスト』(11年)、『シネマルーム28』(10頁参照)とは違い、本作は昔のサイレント映画ではない。キム・ギドク監督はストーリーを盛り上げるために、わざわざ本作をセリフなしで物語るようにしたわけだ。そんな手法を採用したため、2人の人間が長い時間向かい合ったままでいると不自然になるから、当然本作のシーン回しは早い。しかし、セリフはなくても状況設定はわかるし、スクリーン上に映る人物の表情だけで言いたいこと(もしくは言っていること)もわかるものだ、とあらためて確認!そう考えると、何でもかんでも長ったらしいセリフで説明し、わかりきった会話を続けている近時の邦画のつまらなさが余計浮かび上がってくるから、日本人の私としては何ともやりきれない感も。

セリフなしとしたため、観客の緊張感が普段以上に強まることはまちがいない。また、セリフなしでもストーリーを理解するのに苦労することは全くない。しかし、それでもやはり時々違和感を感じることも……。そう考えると、セリフなしへの挑戦には拍手だが、さてその功罪は?

■□■日本の映倫は?韓国の映等委は?■□■

レイティングシステムとは、映画鑑賞などの際にその映画を観ることができる年齢制限の枠およびその規定のこと。先進国を中心に多くの国で規定されており、日本では映画倫理委員会(映倫)が審査を行っている。映倫のレイティングは、①G(どなたでもご覧になれます)、②PG12(小学生には助言・指導が必要)、③R15+(15歳以上がご覧

になれます)、④R18+ (18歳以上がご覧になれます)、⑤審査適応区分外 (一般の映画館での上映禁止)、の5等級。

他方、韓国には日本の映倫に相当する映像物等級委員会 (映等委) があり、そのレーティングは日本と同じように①「全体観覧可」、②「12歳以上観覧可」、③「15歳以上観覧可」、④「青少年観覧不可 (19歳以上観覧可)」、⑤「制限上映可」、の5等級だ。なお、韓国には「制限上映可」専用の映画館がないため、その判定を受ければ、事実上韓国の映画館で上映することはできなくなる。

■□■「制限上映可」は憲法不致！この憲法判断に注目！■□■

韓国では映等委のレーティングをめぐる面白い憲法判断が下されているので、それを紹介しておきたい。事実経過は次のとおりだ。

まず、ワールドシネマが2005年に輸入したメキシコ映画『Batalla en el Cielo』は、性器露出シーンなどを理由に、映等委で「制限上映可」の判定を受けた。そこで映画輸入会社が、06年2月に判定処分の取り消しを求める行政訴訟をソウル行政裁判所に起こしたところ、裁判所はこのうち違憲法律審判を求める申し立てを受け入れ、憲法裁判所に回した。申し立て側の主張は「『制限上映可』は、映画振興法 (06年4月廃止) の第21条第3項第5号に『上映および広告・宣伝において一定の制限が必要な映画』と記されているだけで基準ははっきりしない」ということだった。そして、憲法裁判所は08年7月31日に「制限上映可の等級基準はあまりにあいまい」として申し立てを認め、憲法不致決定を出した。

ちなみに日本では、小説ではD. H. ロレンスの「チャタレイ事件判決」(最大判昭和32年3月13日刑集11巻3号997頁) やマルキ・ド・サドの「悪徳の栄え事件」(最大判昭和44年10月15日刑集23巻10号1239頁) で刑法第175条のわいせつ文書販売罪 (現在は「わいせつ文書有償頒布罪」) における「わいせつ性」が争われた。映画では、映倫の審査を通過したにもかかわらず、刑法第175条のわいせつ図画公然陳列罪で起訴された武智鉄二監督の『黒い雪』(65年) 事件が世間の注目を集めたが、一審 (東京地判昭和42年7月19日判例タイムズ210号191頁) も二審 (東京高判昭和44年9月17日判例タイムズ240号115頁) も無罪とし、検察官は上告しなかった。同様に、日活が日活ロマンポルノの名で製作配給した一般劇場公開用の映画4本 (ただし、うち1本は独立プロの製作) について、映画関係者6名がわいせつ図画公然陳列で、映倫審査員3名が同幫助罪で起訴された「日活ロマンポルノ事件」においても、一審 (東京地判昭和53年6月23日刑裁月報10巻6~8号1107頁) も二審 (東京高判昭和55年7月18日判例タイムズ420号79頁) も、わいせつ性を否定し、無罪とした。(これも検察官の上告はなし。)

■制限上映可判定に3度も再審議を申請！その結果は？■

本作は2013年5月のカンヌ国際映画祭ではじめて公開されたが、男性器切断をストーリーの軸として、家族とは？欲望とは？性器とは？をテーマとした本作が、韓国ですんなり上映できるはずは



メビウス 新宿シネマカリテほか全国順次公開中！
(C) 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.
配給：武蔵野エンタテインメント

ない。しかして、映等委は、本作について2013年6月「制限上映可」の判定を下した。その理由は「映像の内容および表現技法や主題、暴力性、恐怖、模倣のリスクの部分において、青少年に有害な内容を含んでおり、近親の性関係を描写するなど、非倫理的、反社会的な表現があり、制限上映館でのみ上映が可能な映画」というものだ。

これに対して、キム・ギドク監督は6月5日に映等委の委員長宛に電子メールで意見書を送り、「再審議」を申請した。しかし、問題のシーンを削除したうえでの「再審議」にもかかわらず、映等委は、7月17日に当初の判定と同じく「制限上映可」の等級判定を下した。「再分類」ではなく「再審議」を選んだ理由について、キム・ギドク監督は「再分類でも制限上映可判定を受けると、3ヶ月後に再審の資格が与えられるため、配給予定の9月に公開できなくなる可能性がある。そのため、再分類審査を放棄し、韓国公開版は映像物等級委員会（映等委）の指摘を受けた場面を削除した後、再審議を申請することにした」と述べている。

そこで、キム・ギドク監督はさらに問題となった33カットを編集し、7月18日に3度目の再審議を申請したところ、映等委は8月5日、「青少年観覧不可」等級に決定を変更した。その理由は「映像の表現において扇情的な部分は直接的かつ刺激的に表現されており、その上暴力性、恐怖、模倣の恐れおよびテーマの部分においても青少年に有害な内容を含んでいるため、青少年が観覧できないように格別な注意が必要な映画」というものだ。これによって韓国の映画館での公開が可能となったことは喜ばしいが、キム・ギドク監督はさぞかしご不満のことだろう。

ちなみに、7月26日に映画記者および評論家109人を集めて、本作の韓国公開に対

する賛否試写会を開いたところ、賛成93票、反対11票、棄権3票という結果となった
そうだから、ひょっとしてこの結果が映等委に影響したのかも……。なお、その後本作
は8月28日から9月7日まで開かれた第70回ベネチア国際映画祭の非コンペティショ
ン部門に公式招待された。

■□■この父親の心理をどう理解？この性的絶頂をどう理解？■□■

夫の男性器の切断に失敗したら、次は息子のそれを……。そんな妻の心理をどう理解
するかは難しい。しかし、それ以上に難しい夫の心理の1つが、息子の男性器が切断され
たことの原因を感じた父親が、自発的に自らの男性器切断の手術を受けること。しかも、
その時は性器移植手術のことまで考えていなかったはずであるにもかかわらず、その性器
を保存することだ。

他方、面白い(?)のは、息子に男性器がないことを知り、これをいじめの対象にする
不良グループの一人の男性器を、不良グループからレイプされた夫の愛人と息子が共同し
て切断した時、切断したそれを道路に投げ捨てトラックがそれを潰してしまうシーンだ。
そのシーンはある意味衝撃的だが、ある意味ユーモラス。もっともそれは、スクリーン上
に映る男性器を切断されてしまった男の悲劇のサマを、観客席からユーモアさえ感じなが
ら観ているからだが……。

もう1つ夫の心理として理解するのが難しいのは、男性器を失った男でも性的快感(絶
頂)を迎えることができる方法をネットで検索し、結局石で素肌を擦り続けることによる
自傷行為にそれを発見すること。サドでもマゾでもない、自傷行為による性的絶頂を体得
した父親は、強姦罪は免れたものの暴行罪で収監されている息子に対してそれを伝授した
ところ、息子もそれにハマってしまうところが興味深い。しかも、自傷行為によって性的
絶頂に至ることがわかると息子はそれをエスカレートさせ、女から肩に突きたてられたナ
イフによって性的快感(絶頂)を得ることに成功。そして、その体験は男性器を切断され
た3番目の被害者である、あの不良グループの男も……。

家族とは？欲望とは？人間とは？そして性器とは？そんなテーマをつきつめていくと、
これほど難解な心理が次々と登場してくることにビックリ！いやー、映画ってホントにす
ごい芸術だということを、あらためて痛感！

■□■男性器の移植手術に成功！と喜んだが……。■□■

かつて渡辺淳一の大ヒット小説『失樂園』が日経新聞朝刊の最終面に連載されていた時
は、真っ先にそれを読んでいたものだ。現在の同欄の連載小説は14年7月10日から始
まった久間十義の『禁断のスカルペル』。11月1日現在のストーリーの進捗状況は、ヒロ
インの女医・東子らが行った腎臓移植手術をめぐる、警察から臓器売買の疑いを受けて
逮捕されるという事件になってしまったが、やっと釈放されたというところ。愛媛県宇和

島市にある徳洲会病院の石波誠医師を中心とする腎臓移植手術は世間の注目を集めているが、男性器の移植手術ってホントに可能なの？

私はその方面の知識は全然ないが本作を観ると、冷凍(?)保存された男性器がある限り、その移植手術は容易そうだ。しかし、男性器には小便の機能以上に大切な(?)性的機能があるから、問題は物理的に移植手術は成功しても、その大切な機能も移植できるの?ということだ。ドクター立ち合いの下でアダルト・ビデオを見せて、父親から息子に移植された男性器の様子を固唾を飲んで見守っているシーンはある意味ユーモラスだが、さてその結果は・・・?

■あなた、エディプスコンプレックスを知ってる?■

エディプスコンプレックスとは、ウィキペディアによれば、母親を手に入れようと思い、また父親に対して強い対抗心を抱くという幼児期においておこる現実の状況に対するアンビバレントな心理の抑圧のことをいう、とされている。フロイトは、この心理状況の中にみられる母親に対する近親相姦的欲望をギリシア悲劇の一つ『オイディプス』(エディプス王)になぞらえ、エディプスコンプレックスと呼んだ(『オイディプス』は知らなかったとはいえ、父王を殺し自分の母親と結婚(親子婚)したという物語である)。本作はまさに、それがストーリーの背景となるポイントなので、プレスシートにある社会学者上野千鶴子氏の「一度入ったら抜け出せない、家族という名のブラックホール」と題する解説とともにしっかり勉強したい。

私が鑑賞した日の試写はほぼ50人の関係者で満席だったが、鑑賞後のおしゃべりは男性客は「ああ、怖かった」、女性客は「男の人と女の人とでは見方が違うんでしょうね」というものだった。本作を鑑賞した男性客に「怖かった」という感想を語らせた1つの要因は、妻役を演じたイ・ウヌの狂気に満ちた形相と女とは思えない狂暴な行動にあるが、遠い世界のギリシャ神話としてオイディプス王の話聞くのではなく、ごく身近にこんな風にエディプスコンプレックスの姿を見れば、男なら誰だってゾッとするのは当然だろう。それにしても、キム・ギドク監督はすごい映画をつくったものだ。

■この一人二役はすごい!神がかり的な演技に注目!■

妻役を演じるイ・ウヌは本作に出演するについて、当時の所属事務所を辞めるという選択をしたそうだが、それはなぜ?それはわからないが、本作で夫の浮気相手の女と一人二役を演じるイ・ウヌの演技は熱演、怪演を越えて神がかっているとしかいいようがない。パンティ丸見えシーンはもちろん、夫との殴る蹴るの格闘シーンや、おっぱい丸出しシーン、そして再三の強姦シーンが続くから、こんな役に出演することは、以降の女優生命に大きく影響することはまちがいない。それがいい方向に影響すればいいが、万一悪い方向に影響したら……。しかし、キム・ギドク監督作品だからまちがいなし!イ・ウヌはそ

う考えて所属事務所を辞めてまで本作に出演したのだろうが、私に言わせればそれが大正解！きっとそのおかげで、次回作として廣木隆一監督の『さよなら歌舞伎町』（15年1月公開予定）への出演が決まったのだろう。

につきき夫の男性器のかわりに息子の男性器を切断して家を出て行った妻は、仏像に祈りを捧げる謎の男（これをキム・ギドク監督自身がやれば、きっと適役だったはずだが・・・）の姿を見た後は姿を消してしまい、スクリーン上には一切登場しなくなる。それにかわって登場するのが、イ・ウヌが一人二役で演じている夫の愛人で雑貨屋に勤めている若い女だが、一人の女優がよくもこれだけ変身できるものだと感心させられる。この雑貨屋の女は、もっぱら息子や息子をいじめる不良グループの男たちから強姦される役割（？）だが、スクリーンを覗いている限りそれは、この女の服装や挑発的な態度にも問題がある。それはともかく、着やセタイプというのかどうかは知らないが、堂々と上半身を晒した時のこの女のおっぱいの大きさは堂々たるものだから、すべての男性客はそれに注目したい。



メビウス 新宿シネマカリテほか全国順次公開中！
© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.
配給：武蔵野エンタテインメント

■妻はなぜ戻ったの？以降の修羅場はあなた自身の目で！■

しかして、本作中盤のあつと驚くさまざまな展開を経て、今は父と息子が2人安穩に暮らし、それぞれ自傷行為によって性的満足を得ている家に、なぜか再びあの妻が戻ってきたから、さあ大変だ。なぜ、あんなことをして家を出て行った妻をスナリ家に受け入れたの？という疑問はあるものの、そこからの（元）妻の天衣無縫な行動（？）にビックリ！そして、何より不可解なのは、せっかく父親の男性器を移植しても性的機能は回復しなかったのに、戻ってきた妻（母）の姿を見るとなぜ息子（の男性器）は欲情し、勃起してくるの？ということ。さらに、それを見た母親は、なぜそれを嬉しそうに見ているの？ということだ。そんなシーンが続くと、その後想像できる風景は・・・？

ここまで書けば十分だろう。キム・ギドク監督最大の問題作の、その後の展開はあなた自身の目でしっかりと。

2014（平成26）年11月5日記